

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

涙女 (なみだおんな)

(哭泣的女人 / Cry woman)

2002年・カナダ、フランス、韓国合作映画・90分
配給 / ミラクルヴォイス、ビターズエンド

2004 (平成16) 年3月26日鑑賞
＜テアトル梅田＞

Data

監督：劉冰鑾 (リュウ・ビンゼン)

出演：廖琴 (リャオ・テン) / 偉興

坤 (ウェイ・シンクン)

👁️👁️ みどころ

チンドン屋のような派手な葬儀の行列や葬儀場での麻雀大会など、中国のお葬式はさまざまなスタイルがあり面白い・・・？この映画は、そんな中国のお葬式に登場する「哭き女」を主人公にした奇妙な愛(?)の物語。カネ、カネ、カネの社会の中、「哭き」を武器とした女のたくましさは見事なものだが、やはりそれだけでは生きていけない・・・？マイナーな映画だが一見の価値あり。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

＜中国のお葬式その1—練り歩き＞

中国のお葬式をテーマにした有名な映画は、「中国の山田洋次監督」といわれる馮小剛(フォン・シャオガン) 監督がつくり大ヒットした『ハッピー・フューネラル (大腕 / Big Shot's Funeral)』(01年)。中国のお葬式のやり方にはいろいろあるらしい。

その1つは、遺骨を運ぶ時のチンドン屋のような行列による練り歩き。遺骨を持った遺族代表を先頭に、幟をたて、鐘、太鼓をたたき、大声で歌いながらの行列による練り歩き。このような風習は日本の田舎にもあったようだが、いかにも中国風なのは、派手な造花や張りぼてのブタやキリンなどの奇妙な動物・・・。

＜中国のお葬式その2—哭き女＞

もう1つは、今は亡き人をいつまでも泣いて偲ぶ作業(?)は、遺族だけではつとまらない(?)ため、金で雇われた「哭き女」という職業があること。「泣く」と「哭く」とは大違い。すなわち後者は、「慟哭」という言葉からわかるとおり、大声を張りあげて哭き叫ぶこと。哭きながらしゃべるセリフは、故人の生前の功績に応じたケースごとのオリジナ

ルなものから、定型ものまでいろいろあるらしい・・・？またその料金もさまざまで、この映画の主人公グイ（寥琴／リャオ・チン）は、当初は、1ステージ（？）20元程度だったが、「売れっ子」となった後は、10倍以上に大幅にアップした。ちなみに、その値段一覧表は下記のとおり。

記

涙のお値段一覧表	
傾盆大雨	百元
四隣不安	二百元
高歌放唱	三百元
豊饒三日	三百元
山崩地裂	四百元

<面白い冒頭シーン>

映画の冒頭シーンが何とも面白い。夫のゲンと一緒に寝ていたグイは、朝起き上がると歯ブラシとコップを持って歯磨きに。さすがに水道は整備されているものの、日本でも昔の小学校にあったような、室外にあるコンクリート枠の共同流し。カメラはグイのお尻を追いながら、歯を磨き、水で口をすすぐ音をリアルに拾っていく。他人の目など全く気にせず、ごく自然のままのたくましいグイの姿に、まず圧倒される。そしてこのグイのたくましさは、最後まで続く。

<中国の現実その1ー中央と田舎>

今、グイは北京に住んでいるが、これは田舎モノのグイたちにとっては不法滞在。同情をかうために知人から借りた子供を抱いて、グイはポルノも含む海賊版のDVDを売って稼いでいるが、これももちろん違法。夫のゲンは麻雀ばかりして遊んでいるグータラ亭主だから仕方なくやっている仕事。しかし、公安から目をつけられたグイは、ついに田舎へ戻されることに。もともと、これにはグータラ亭主の麻雀の席でのケンカも大きな一因だが・・・。ちなみに戸籍のない子供のことを中国では「黒孩子」と呼ぶらしい・・・。

<中国の現実その2ーカネと権力>

ゲンは麻雀仲間の男を殴り、目に大ケガをさせたため、今は何と刑務所に。そのため、グイは、被害者の男とその妻から「治療費9000元を弁償しろ！」と迫られている。また面会にいくと、ゲンは「早くここから出してくれ」と泣いて訴える始末。しかもその手段は「カネで何とかなるだろう」というもの。とにかく、今の世の中は、カネ、カネ、カネ。カネがなければ、今こんな境遇のグイは、生きていくことができないわけだ。

「哭き女」として頑張って金を貯めたグイは、今日、鑑別所（？）の所長さんを1人で

訪ね、「5000円でゲンの保釈を・・・」と頼むが、「それじゃ、無理だよ」と一蹴された。しかし、それを予想していた(?)グイは、いきなり上着を脱ぎ、下着姿に……。すると所長は、「君、何をするんだ」と言いながらも、足は入口へ進み、しっかりとドアを密閉。あとは……。日本でこんなことがまかり通ったらエライことで、司法制度改革どころではない……?

<哭き女の資質>

グイはもともと劇団に所属していた身だから歌はうまい。そんなグイが「哭き女」になったのは、田舎へ帰り、今は結婚して葬儀屋を営んでいる、元カレのヨーミン(偉興坤/ウェイ・シンクン)の勧めによるもの。ややこしい話だが、ゲンはヨーミンの親友。ところがグイは、ゲンが刑務所に入った後、ヨーミンを頼って行き、たちまちいい仲に……。こんないいの……?

それはともかく、目に大ケガをさせた夫婦がグイの家に入り込んで、治療費9000元を払えと迫られたとき、グイは、「ああ、どうして私だけがこんなに不幸な目にあわなければならないのか!」と哭き叫んで、夫婦に「2カ月だけ待ってやる」と言わせて、退散させた。これを陰から見ていたヨーミンは、たちまちグイの「哭き女」としての資質を見抜いたというわけだ。



【涙女】
アーティストフィルムよりDVD発売中

はじめは半信半疑でヨーミンの言葉に従ったグイも、最初の仕事で先輩の哭き女からバカにされるや、一念発起。カセットテープを聴きながら猛練習に励んだ結果、今ではご指名の注文(?)が次々と……。奥さんの目を盗んでヨーミンとベッドの上で「励んでいる(?)」最中でも、テレビで大きな事故が報道されるや、コトを中止して、たちまち現場

へ。ヨーミンも仕事熱心なら、グイも負けず劣らず仕事熱心なことだ。

<中国の現実その3—契約はこれで大丈夫?>

中国は近時、「人治国家」から「法治国家」へと、その体質を大きくあらためようとしている。そして2004年3月5～14日に開催された第10回全人代（全国人民代表大会）での憲法改正をはじめとして、法律制度も少しずつ整備されてきている。また2002年からは、日本の弁護士にあたる「律師」の試験も、従来の律師資格のみを対象とする律師資格試験から、裁判官、検察官を含む法曹三者を共通の対象とする司法資格統一試験制度に移行したところだ。しかしこの映画では以下述べるように、法的整備はまだまだ・・・?

まず第1に、「哭き女」への注文も、その承諾もすべて口頭のみ。グイが売れっ子(?)になり、最高級メニューの500元の注文を受けたとき、今やそのマネージャー(?)となっているヨーミンは、グイの予定をおさえておくため、手付金200元を要求し、注文者もその場でこれを支払ったが、これはすべて口頭のみ。もちろん領収書もなし。こんなやり方だから、ある時グイは、約束どおりお金が入っていないと文句をつけることに・・・。これに対する遺族側の言い分は、「あんたの哭き方が悪かったから」、すなわち、債務不履行(不完全履行)の主張だが、グイはそういう論争に乗るわけではなく、いきなり大声でののしり始め、挙げ句の果てに、平手打ちを食らわす始末。法的紛争の処理の方法が何と遅れていることか・・・と思わざるをえない。

第2に、ケガの治療費9000元を要求してグイの自宅に乗り込んできた被害者夫婦とグイとの不法行為による被害弁償の合意(示談)は、成立しているのかどうかはそもそもはっきりしない。なぜなら被害者側は、一方的に「2カ月間猶予してやる」と言い放って、哭き叫ぶグイを後にしただけだから。しかし、その後の展開をみれば、グイはこれを弁償するためにお金を貯めていることは確かだから、まがりなりにも示談は成立しているものと思われる。ところが、やっと貯めたお金を持って被害者の家を訪ねると、被害者夫婦は既に離婚してどこかへ行ってしまったとのこと。ああ、ラッキー・・・?

<ゲンはどうなったの?>

不思議なことに、前述の鑑別所所長への5000元という金銭による賄賂と肉体提供の賄賂にもかかわらず、どうもゲンはまだ釈放されていない。これは明らかに契約違反では・・・?もともとグイと所長の間に契約が成立しているとしても、それは公序良俗に違反する契約であることは明らかだが・・・。

今日は公安2人がグイの家を訪れてきた。その説明によれば、ゲンが脱走をはかり、挙げ句の果てに誤ってピストルで撃たれて死んでしまったとのこと。そして、「これが死体検案書だから、サインをして」と2人の公安は事務的に冷たいお言葉。日本だったら、「そんなバカな!」、「真相を究明しろ!」と大騒ぎになるところだが、公安の強い中国では、グ

イは何も言えないまま、2枚複製用の紙にサインをして、それでジ・エンド。何とも簡単（いい加減）な法的処理だが……。人間1人の生命が、こんなに軽くていいの……？

<この映画の魅力は？>

この映画の監督である劉冰鑒（リュウ・ビンジェン）のデビュー作の『硯』（96年）も、それに続く『男男女女』（99年）も、国際的には高く評価されながら、中国国内では上映許可が下りなかった問題作。それは、これらの映画が中国の民族色や閉塞的な姿を濃厚に打ち出したり、同性愛を描いたりしたためとのこと。その傾向はこの『涙女』でも顕著。この映画は2002年カンヌ国際映画祭の「ある視点部門」出品をはじめ、数多くの映画祭に出品されたが、中国本国では上映許可はされていない。私は、張藝謀（チャン・イーモウ）監督や陳凱歌（チェン・カイコー）監督の作品ほど魅力があるとは思わないものの、中国のホントの生々しい姿を描いていることはまちがいない、その点の魅力は十分だ。

<廖琴（リャオ・チン）の魅力は？>

ヨーミン役の偉興坤（ウェイ・シンクン）も、グイを演じた廖琴（リャオ・チン）も共に映画初出演とのこと。実は、新聞広告やチラシに写る1枚のグイの写真は、実にキレイで魅力的な女。そして確かに映画の中にこのシーンはあるが、それはほんのワンシーンだけで、1番キレイにしているときの姿。残りの99%のシーンは、ケツタイな服を着て、珍妙なヘアスタイルで、ケバイ（？）スパッツをはき、お尻をふりふり歩くグイの姿。そしてまた、哭き叫び、わめいてケンカするグイの姿。だから、決してそんなに魅力的な女とは思えない。映画の中で感じるのは、とにかく、たくましい女、強い女、したたかな女ということだけだ。もっとも、ゲンの死亡を聞いた直後、ヨーミンに対して、「私と結婚して……」と言い寄るグイはやっぱりオンナ……。しかしそれが「拒否」されるや、グイの頭の切り換えは早い。やっぱりしっかり者だ。そんなグイの役柄を、廖琴（リャオ・チン）は、映画初出演とは思えないほど、実にイキイキと演じている。もっとも、ちょっただけ見せたスレンダーなヌード姿でのヨーミンとのベッドシーンはさすがにキレイだったから、キレイなお嬢さま役で出演すれば、意外にホレホレするような女なのかも……。とにかく今日は、『涙女』というタイトルどおりの面白い映画を観ることができて大満足。

2004（平成16）年3月27日記